

2022年11月20日（日）「主と共にある幸い」

使徒 20:7-12

7 週の初めの日、私たちがパンを裂くために集まっていると、パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた。8 私たちが集まっていた階上の部屋には、たくさんの灯がついていた。9 エウティコと言う青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた。10 パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。「騒がなくてよい。まだ生きている。」11 そして、また上に行って、パンを裂いて食べ、夜明けまで長い間話し続けてから出発した。12 人々は生き返った若者を連れて帰り、大いに慰められた。

今年も教会に集う子どもたちの祝福を切に願って、子ども祝福礼拝を実施させていただいております。私が牧会に携わってから最初に取り組み始めたことの一つは、日曜学校に出席している子どもたちにも礼拝に参加してもらえよう環境を整えることでした。その目的は、子どもたちがどのタイミングで「大人の礼拝」に移行できるようになるのかという境界線をなくすこと、生まれたときから礼拝に出席する権利を持っているはずの子どもたちからその機会を奪わないことでした。私自身は、たしか小学生になった時点で礼拝に出席するように言われた記憶がありますが、父親の説教がとにかく「長い」「難しい」と感じていたことを思い出します。今だから告白しますと、1時間の説教の間気を紛らすためのオモチャをこっそり持参していたものです。子どもたちが礼拝に参加している以上、説教者はできる限り理解できる話をしなくてはならないでしょう。そのような思いを込めて、ここ最近子ども祝福礼拝のときに説教の中にスキットを取り入れるようにしております。今日もホサナクラブのスタッフたちのご協力を得て、御言葉をベースとした劇をお楽しみいただきたいと思います。

まずはテキストの内容を見てまいりましょう。ここには書かれていませんが、文脈ではパウロの第二回伝道旅行でエルサレムへ向かう途上、トロアスという地に立ち寄ったときのことが書かれています。旅の目的は、異邦人教会からの献金をエルサレム教会に届けることでしたが、ユダヤ人に命を狙われていたパウロにとって、これは命がけのミッションだったはずです。一行は一週間トロアスに滞在していたようですが、翌日に出発という段階に入り、この地の信徒たちは集まってパウロの話に耳を傾けました。

11. パウロの第一次および第二次宣教旅行



「週の初めの日」とありますが、ユダヤ人とローマ人とでは日にちの数え方が違いますから、著者ルカがどちらを採用しているのか議論のあるところですが。ユダヤ式なら土曜日の日没から始まったと考えられますし、ローマ式なら日曜日の夜中に始まったということになります。私は、ルカがローマ式の考え方を採用していたと考えていますので、この集会は日曜日の夜始まったものと理解しています。トロアスの信者たちも日中は仕事で時間が拘束されていましたから、夜が集まるのに良い時間だったようです。

「パンを裂くため」とありますが、これは愛餐会とも聖餐式ともいずれとも取れる事柄であり、彼らが何らかの意味で飲食を共にしながら礼拝をささげていたことが窺えます。パウロの話は「夜中まで続いた」ようですが、いったい何時間説教をしていたのでしょうか。晩年の父の姿を思い出しますが、自分の人生の残り時間が少ないことを認識していた彼は、講壇で言い残すことがないように、毎週1時間半説教していました。成人していた私にとってもなかなかハードでありましたが、パウロの説教は更に長かったのでしょうか。原稿なしに話し続ける彼は、豊富な聖書知識がどこまでも溢れ出てやみませんでした。

さて、8節でわざわざ「**私たちが集まっていた階上の部屋には、たくさんの灯がついていた**」と言われているところに注目しましょう。このような細かい描写の中に、当時の状況を読み取る鍵が隠されていることが多い。まだ電気のなかった時代ですから、明かりとなるのはランプの灯以外にありませんでした。それが人の集まる部屋のあちこちに置かれていたものですから、二酸化炭素が充満してやや酸欠状態になっていたのではないかと考えられています。使われていた油に香料が含まれていたとしたら、その香りが眠気を誘った可能性もあるでしょう。そもそも、普通は寝る時間帯なのですから、何人もの人が鼻提灯を膨らませていたのではないかと想像します。

そのような状況で、ドサッという物音がしたので、皆が我に帰ると、何と青年ユテコが窓から落ちてしまっていたというのです。

エウティコと言う青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた。(20:9)

「ユテコ」という名前は「幸運な」という意味であり、奴隷の身分から解放された自由民の間でよく聞かれる名前でした。しかし、その青年がとんでもない不幸に見舞われてしまった。祝福であるはずの礼拝の場で、居眠りによって死んでしまったというのです。それまでの満たされた喜びは吹き飛び、一同は騒然となったに違いありません。「青年」と訳された言葉は原文では「νεανίας／ネアニアス」であり、8～14歳ほどの少年をイメージしていただくとよいでしょう。今で言うユースくらいの子でありますから、そんな子どもがこのような場に同席しているということ自体が驚きでもあります。老若男女が当然のように礼拝に参加し、パウロのメッセージに耳を傾けていたのです。おそらく、彼も労働に従事していたでしょうから、疲れた状態でその場に居合わせていたのであり、説教中に寝ていたからといって責められるような話ではありません。

それでは、この状況を再現すべく、スキットをやらせていただきます。

- パウロ 皆さん、主イエスは言われました。あなたの敵を愛し、あなたを迫害する者のために祈りなさい。これが旧約聖書の教えと一致してないですって？とんでもない。イエス様は旧約聖書を成就するために来られた、旧約聖書の真の解釈者なのです。
- プリ子 ねえねえ、お母さん。パウロ先生のお話、いつまで続くのかしら。もう夜の2時よ。ほら見て、うとうとしてる人が何人もいるわ。
- 母 そんなこと言っちゃダメよ。熱心に聞いてる人だっているじゃない。パウロ先生は明日の朝出発してしまうのよ。もう会えないかもしれないと思って、みんな集まってきたんだから。
- プリ子 そんなこと言って、お母さんだっであくびしてるじゃない。
- ハレター そのとき、何かがドサッと落ちる音が聞こえました。
- ルカ 大変だ！ユテコが窓から落ちました！
- 母 なんですって！？いったい何が起きたの！？
- ルカ しばらく前からうとうとしているのが気になってはいたんです。部屋に熱気がかもってきてたから、少し酸欠状態になっていたかもしれないですね。
- ハレター 全員大慌てで一階に駆け下りて行きました。
- 母 ユテコ！ユテコ！
- プリ子 ルカ先生、ユテコの状態はどうでしょうか。
- ルカ 頭部から落ちたようですね。呼吸が止まっています。
- 母 先生、お医者さん。お願いします。どうか助けてあげてください。
- ルカ 最善は尽くしますが、難しいかもしれません。
- パウロ 皆さん、騒いではいけません。ユテコを私に見せなさい。
- ハレター パウロはユテコの顔に自分の顔を合わせるようにし、体ごと覆いかぶさり、祈りをささげました。
- パウロ おお、力ある神、主イエス・キリストの父よ。私たちの愛するユテコがなぜ死ななければならぬのでしょうか。彼が礼拝者としてこの集いに加わっていたことは、あなたが一番ご存知です。この子の命をどうぞお返しください。一時の眠りから醒まさせてください。
- ハレター パウロの祈る姿は、旧約の預言者エリヤやエリシャを彷彿させるものでした。そして、ユテコを抱き上げると、そこにいる人々に向かっていました。
- パウロ 騒がなくてよい。まだ生きている。
- ユテコ 〔目を醒し〕あれ？僕、どうしてここにいるんだろう？
- 母 ユテコ！ユテコ！生き返ったのね！大丈夫？痛くない？
- ルカ よかった。本当によかった。
- プリ子 パウロ先生、ユテコを生き返らせてくれて、ありがとうございます。
- パウロ 私の力ではありません。聖霊にはどんなことでもできるのです。
- ハレター 大惨事となった夜の出来事は、一転喜びの涙と慰めの時となりました。

少し脚色はありますが、当時の状況はこんな感じだったのではないのでしょうか。礼拝に出席していた一人の少年の事故死。これは、群にとってどんなにショッキングな出来事だったことでしょうか。パウロとお別れの時、祝福に満ちた時間が、悲劇に変わってしまったのです。ユテコの両親の気持ちを考えてとき、耐えがたい苦痛にすら襲われます。行き場のない悲しみと怒りの矛先がパウロに向かった可能性すらありました。しかし、そこに神の霊の介入があった。この悲劇を乗り越えさせ、かえって一同に大きな喜びと慰めを与えてくださったのです。

11節を読むと、こんなことが起きた後にも一同は食事をし、パウロは夜明けまで話し続けたと書かれています。この人々の感覚はどうなっていたのでしょうか。肉体的に疲れてはいなかったのでしょうか。もう解散！とはならなかったのでしょうか。パウロは一睡もしないで出発したようなのです。この非常識とも言える集会は、普通の牧師にはなかなかできないことですが、韓国などでは重要な祈りの課題があるときには徹夜祈祷が実施されることもあると聞きます。今日の記事から読み取れることは、ここに登場する人々がもはや時間の拘束から解放されており、御言葉を聞くためであるならば疲れを忘れるほどであったということです。そして、そのように聖霊に満たされているとき、想像もできないほど大きな神の御業を見ることになるのでしょうか。

12節に出てくる「慰められた」という言葉は、原文では「παρακαλέω／パラカレオー」という動詞であり、第一義的には「傍に呼ぶ」ことを意味します。この会衆には主イエスと共にある慰めがあったのです。主と共に過ごしている時間、そこでしか得られない喜びがある。これは一人で聖書を読んで祈ることだけではどうしても得られない感覚です。同じ主を信じる者が集まり、御言葉を分かち合い、共に祈る。そこには大きな力が働くのです。ユテコ少年もその一人に加えられていました。ショッキングな事件は起きましたけれども、それを覆って余りある神の力がその群に働いた。そのことをこの記事は伝えているのです。

私たちが生きる現代の教会はどうでしょうか。そこに主の慰めがあるのでしょうか。私は毎週の礼拝と祈祷会に、いつも主の慰めを見出しています。そして、そのことを教会の皆様にも味わっていただけるように、祈りつつ備えております。ユテコという名前は「幸運な」という意味の名前だと申しました。彼は瞬間的に「不幸な」人となったように見えました。主イエスにある群の中で、やはり「幸いな」人だったのです。いえ、このような出来事を通して、彼の名は後世にまで語り継がれ、主イエスのいのちにあずかった「幸いな人」として覚えられるようになりました。主にある群に属する幸いを、ここに集うすべての人が味わい知ることができますように。

【祈り】

慰め主、イエス・キリストの父なる神様。初代教会の礼拝にも子どもが参加していました。その子どもを主は深く心に留めてくださいました。今でも同じでしょう。主イエスの思いは変わらず子どもたちに注がれているはずです。子どもだけではありません。主にある群に属する一人びとりを主は愛してくださっています。この礼拝に集うすべての人にまことの慰めを与えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
老若男女を問わず、主を求める人々を御許に呼び集め給う、父なる神の愛、
幼き心にも御言葉を語り、福音の受取手となし給う、主イエス・キリストの恵み、
信仰者の集うところに共にまし、上よりの慰めを与え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、とりわけ教会に連なる子どもたちの上に、限りなくあらんことを。